

日本ギヤスケル協会（編）
『没後 150 年記念 エリザベス・ギヤスケル
中・短編小説研究』

大阪：大阪教育図書、2015 年、4,000 円、338 頁

猪熊恵子

本書は、エリザベス・ギヤスケル没後百五十年を記念してギヤスケル協会が編んだ、静かな論集である。〈静かな〉という形容詞を宛てる理由の一端は、大野龍浩氏による編集後記が説明してくれる。大野氏によれば、記念論集の出版が検討された際、ギヤスケル協会の役員会には「微妙な空気が流れた」（323）という。文学研究のみならず、人文学そのものの学問としての存続を問われる昨今、ギヤスケルの生誕ではなく没後を記念し、百年でも二百年でもなく百五十年を節目として、中短編作品研究に関する書籍を世に問うことが、多大な努力と忍耐を要するものであることは想像に難くない。であってみれば、躊躇と義務感と期待の入り混じった「微妙な」（323）沈黙が役員会の部屋に流れたことも、想像に難くない。しかしその沈黙をあえて破り、没後百五十年という〈静かな〉節目を〈静かに〉迎え、ギヤスケルという作家の中短編小説のありようを〈静かに〉分析しようとするのが本書である。

そもそも、ギヤスケルという作家自体、その批評史を振り返ってみれば、〈静けさ〉とともに論じられてきた。ヴァレリ・サーンダズ氏の第一章が指摘する通り、ギヤスケルには、自伝はもとより彼女をよく知る人物によって書かれた伝記も存在しない。そしてギヤスケルの娘たちは、母親にまつわる「思い出話を集めるどころか、活字になりそうな資料を必死になって破棄」（5）してしまった。こうしてギヤスケルの生の声を聞く「正規のルート」（10）が断たれたことにより、十九世紀末までの批評家・書評家たちは、論じる際の便利な足掛かりになるような断片的な言説、「あるいは当てずっぽうの意見、またはそのほとんどが彼女の小説からねたを仕入れた根拠のない作り話」（10）に頼ることを余儀なくされたのである。その後二十世紀に入っても、ギヤスケルは「しばしば二人の姉妹ともいえる」シャーロット・ブロンテやジョージ・エリオットの「間に挟まれ」た形で批評されることになる（11）。ヴァージニア・ウルフも、「手に入る手紙はない」うえに「ゴシップもな

い」ギヤスケルとは、いったい「どんな人だったか、(中略)みなが忘れてしまったようだ」と述べる。ウルフはまた、ギヤスケル本人は無理でも、「家なら描き出すことができる」というチャドウィック夫人の言を取り上げ、彼女を取り囲む事物を描くことはできても、そのなかにすまう作家自身の声を聞くことができない、と述べる(12)。そして実際、このウルフの言葉が象徴的に示すように、批評家たちはギヤスケルを論じるにあたって、「いろいろな場所(特にクランフォードの舞台となったナッツフォード、マンチェスターやウィットビー、シルヴァデイル、ウェールズ)」(12)の地理的記述を引き合いに出し、「私生活の謎の部分」(12)を補おうとしてきた。もちろん、ギヤスケルを取り巻くこうした〈静けさ〉と〈沈黙〉は後に、ジョン・チャプルとアーサー・ポラードの手による書簡集(1966)の「心温まる、話があちこちに飛ぶ、家庭的な、そしてゴシップ満載の手紙の数々」(13)によって音を与えられることとなる。しかし一方で皮肉なことに、家庭の細々とした瑣事にまつわる「冗舌な手紙の山」を前にしても、作家ギヤスケルの「本当の」姿や輪郭を推測するのは依然として難しい、とサーンダズは言う。事実、第一章の結び近くにあってもサーンダズはやはり、「ギヤスケルの評価は定まらない。(中略)作家本人は、閉じられた窓の向こうにちらりとその姿が見えるだけだ」と述べるのである(13)。(ただし第一章は Pickering and Chatto から 2005 年に出版された *Lives of Victorian Literary Figures Part 3* から取られたものであるため、サーンダズの「現在」は我々の現在から 10 年ほど前である)。

サーンダズが明確に跡付けた批評史からも明らかな通り、生前の「声」を記録した自伝や伝記が存在しない作家エリザベス・ギヤスケルを論じることは、決して容易ではない。そして、その〈静けさ〉を紐解こうとするうちに、鳩のようなギヤスケル夫人、というステレオタイプにはまっぴい危険も少なくない。それでは本論集は、作家ギヤスケルとその中短編作品といかにして向き合い、彼女の「声」に近づこうとするのだろうか。この問いを考えると、ギヤスケル作品を論じる際の重要なキーワードとされる〈つながり〉、〈共感〉、〈連鎖〉といった言葉が想起される。実際、これまで多くの批評家たちが、作家ギヤスケルとその作品を論じる際に、同時代の他の作家たちの作品と彼女のそれとを数珠のように繋ぎ、また作品内の手がかりと彼女が生きた地理的歴史的背景とを並置することで分析の足がかりを得てきたように、本書に収録された多くの論考もまた、さまざまな〈連鎖〉の中から彼女の声をすくい上げようとする。第二章、ジョアンヌ・シャトック氏の議論は、書評家として同時代の他の作家たちに寄り添うギヤスケルの姿勢に注目しているし、第

三章以降も、「作品の構造」、「人間関係」、「社会とのかかわり」、「歴史とのかかわり」、「フェミニズム」、「キリスト教」など、彼女がヴィクトリア朝の大きなコンテクストのなかで、またはそのコンテクストに対して、いかなるつながりや関わりを持っていたのか、という点に焦点を絞る。

本書は実際、二十六もの異なる論考を重ねることによって、複雑に織りなされた網のなかにギヤスケルを編みこみ、また一方で、その複雑に絡み合った擦糸の束の中から、彼女の存在をひも解いていく。すべての章を個別に論じることは紙幅の都合上不可能だが、以下にいくつかの章を詳しく見ていきたい。第四章宇田氏の議論は、ギヤスケルの「終わりよければ」を、イブセンの「人形の家」と比較している。そしてギヤスケルのエンディングが、イブセン的なオープンエンディング、つまりヒロインのその後の描写を欠落させることによって終えるのではなく、むしろ書き尽くすように描写して終わる点を議論している(45-6)。第五章の齊木氏は、ギヤスケルの描写が、語り残すことによってなにかを物語るのではなく、むしろあらゆる隙間を埋めるように詳細に語りつくし、人物間の関係を描くにあたって、イメージアリーを数珠のようにつないで「連想」の鎖を形成する点を議論している(52)。

第三部「人間関係」も同様に、ギヤスケルが他者との関係において欠けて／飢えていたなにかを論じるのではなく、豊かで穏やかな人間関係のなかに身を置いて作品を執筆した様子を浮き彫りにする。例えば第九章芦澤氏の議論は、「異父兄弟」における「私」の語りが、「わたしたち」みんなの物語となっていくさまを指摘しつつ、一人称の語り手が語り手の「個」としての輪郭を他から切り離して主張する様子ではなく、むしろ語り手の「個」が他者のそれと融合していくさまを明らかにしている(108-109)。こうして前半部の各章は、ギヤスケルという個人を他者と分離し、大きな背景から屹立する何かとして同定するのではなく、他者とつながるギヤスケルの姿を、そして丁寧に語りつくすようにテキスト空間を言葉で満たすギヤスケルの横顔を、他の作家や他の事物と連ねることによって論じていく。

第四部「社会とのかかわり」第十一章(木村晶子氏)でも、この姿勢は貫かれている。この章は、「リジー・リー」のヒロインであるリジーの言葉がテキスト上に表出しない点に注目する。しかし「リジー・リー」という作品は、そのヒロインの〈沈黙〉を埋め合わせるにあたって、家父長制的枠組みへの暴力的反抗を見せるのではなく、むしろ「女性の連帯や母性の力」によって〈墮ちた女〉たちを「ひそかな」形で救済していこうとする(133)。むろん、そんな「ひそかな」救済だけではリジーのヒロインとしての個性確立を下支えすることはできず、〈墮ちた女〉自身の物

語が正面から描かれるのは「『ルース』を待つことになる」(133)、と木村氏は言う。しかし一方で、ヒロインの個性が確立されぬまま、つまり彼女の声がテキスト表面に顕在化しないまま、ひそやかな形で静かに終わることもまた、これまでの各章の議論に照らしてみれば、意味があるのかもしれない。言い換えるなら、ギャスケル作品における〈沈黙〉とは、単なる欠損ではなく、周囲とのネットワークやつながりを築くうえで礎となりうるということ、第十一章の木村氏の議論とその他の二十五の論考とが、相補的に証明しているようにも思われる。

第十四章の加藤氏の議論では、ギャスケルが描かなかったクリミア戦争をどう読むか、という問題が提起される。作家が描かなかったテーマやレトリックの不在そのものをそもそも議論するのか、というのはきわめて微妙な問題である。しかし加藤氏はこの難局を、ギャスケルならばどのようなクリミア戦争を「描き得た」のかという視点の転換によって回避し、目の前のテキストそのものよりも、その背後にありえた可能性の数々を塗りつぶすような分析を展開する(169-172)。第十六章の矢次氏による「モートン・ホール」の議論は、ギャスケルの歴史表象の在り方を取り上げ、その描写が、戦いや争い、事件などを羅列していくような男性的歴史記述ではなく、むしろその大きな歴史事象のはざままで周縁に追いやられた人々の苦悩を描き出すものである、と指摘する(189)。第十七章、鈴江氏の論考では「グリフィス一族の運命」が議論され、作品の最終局において、さまざまな可能性に含みを持たせるような終わり方ではなく、あくまで「客観的記述者の態度に帰って」「容赦なく冷厳な事実を書き尽くす点が指摘される(205)。第十八章、鈴木氏の議論でも、歴史小説という単一の枠組みでは内包しきれないジャンルの混交と、その混交のなかで描くギャスケルの横顔に照準が合わされる。こうして本書の多くの章は、ギャスケルが目前の事象を、静かに、淡々と、最後まで語りつくす際の姿勢をなぞるようにして、複雑なヴィクトリア朝のコンテクストの網の中に彼女を位置づけ、他者とのつながりによって規定される彼女のありようを記述していく。

第六部「フェミニズム」においても、男性との明確な対比や男性中心主義社会のなかでの抑圧、といったお決まりのパターンが焦点化されることはない。第十九章の西垣氏は、「マーサ・プレストン」と「一時代前の物語」における看護のテーマを扱うが、看護役の女性が男性患者の看護によって自分の人生を棒に振るといった安直な図式化は、当然ながら提起されない。代わりに、ギャスケル作品における看護が、「女性同士の相互扶助ネットワークに基づく自活」(226)を促進し、女性たちのホモソーシャルな共同体を堅固にするための契機として機能する点が明らかに

される。第二十章の木村正子氏も、「マンチェスターの結婚」における男性性と女性性の在り方を取りあげ、両者が対立概念として存在するのではなく、互いに依存しあい結びつきながら自己の存在を規定する点を指摘している。「女性の沈黙は長期的視野で考えると、それを引き起こした男性の沈黙とも不可分に結びついている」(238) という章末の主張にも、この点は明確に見て取れるだろう。

第七部「キリスト教」においては、ユニテリアン派その他の神学的枠組みのなかでギヤスケル作品が議論される（のだと思うが、罰当たりなうえに不勉強な筆者には、これらの論考を評する資格があるのか、まったく心もとない）。第二十三章の中井氏の議論では、ギヤスケルの描く「荒野」のイメージが、ブロンテ姉妹やその他ロマン派詩人たちのテキスト世界に広がるような、惜しみなく奪い、強迫的な欠如感を生み出すような場面として存在するのではなく、むしろ登場人物を癒すような場所である、という興味深い指摘がなされる（270-271）。第二十四章の足立氏による「ジョン・ミドルトンの心」の読解においても、ギヤスケルが本来「目に見える外面から内面を描くのを得意とした作家」（289）であること、その一方で、長さの制限が厳しい短編作品においては、事物と事物を暗示的につなぐシンボリズムの手法を効果的に用いていたことが指摘される。つまりギヤスケルの作品世界における神や大いなる自然は、圧倒的で得体の知れない脅威、不在、欠如、物言わぬ力、として描かれるのではなく、身近にある事物をよりどころとして、静かに、着実に手繰り寄せられるような存在であることが示唆される。ジョージ・エリオットのよう、登場人物の内的志向が深く掘り下げられるうち、その人物を囲む外界の事物の輪郭がぼやけていくような瞬間や、のちのウルフの作風に特徴的な、内的志向の流れに揺られるままに、外的事物の形が刻々と変化するような瞬間は、ギヤスケル作品にはほとんど存在しない、と言い換えてもよいだろう。むしろギヤスケル世界における〈外的事象〉や〈現実社会／世界〉は、登場人物の人生をつなぎとめ、受け入れるものとして堅固に存在しており、登場人物の内面と彼らが暮らす世界とは、有機的かつ安定的に結びつき、互いに互いを支えあいながら存在するのだということを、本書後半の各章は明らかにしている。

ここまで概観してきたように、本書に収録された多くの論考は、ギヤスケル自身の堅実な描写姿勢をそのまま写し取るようにして、彼女の経験と作品世界を、着実に、淡々と読み解いていく。そして一つ一つの章が他の各章と結びつき織りなされ融合することで一冊の本となっていくさまは、そのままギヤスケル世界のありようをアレゴリー的に映し出しているようにも思われる。ギヤスケルは、自らの「声」

で「自伝」を綴ることもなく、親しい文人の手に「伝記」を託すこともなく、その娘たちもまた、母について多くを語らなかつた。彼女の作品世界は、目の前に展開する歴史の一こまや風景を、冷静に、淡々と、ときにいたずらっぽく、生き生きと描き出していく。そうであってみれば、没後百五十年という静かな節目に出版された本書が、ギヤスケル作品に寄り添うようにして、彼女のテキストをなぞっていく様子は、なによりも雄弁にギヤスケル世界のありようを物語っているし、その世界の魅力の明らかな証左となっているように思われる。

(東京医科歯科大学准教授)